

## アジアンタム

イノモトソウ科 PTERIDACEAE (APG分類では PTERIDACEAE)

属名 **Adiantum** [アディアントウム] ホウライシダ属**英米発音** アディーア<sup>ン</sup>タム [ad-ee-AN-tum]

**属名由来** 命名 リンネ、1753年。テオプラストス『植物誌』第7巻にはアディアントン (ἀδίατρον <adianton>) の記述がある。「……すなわち、その葉は水に浸されても、露がおりても、湿ることがない。水分が葉に留まらないからである。そのことからこの名もつけられた。……」(大月真一郎・月川和雄訳)。この文献では白いもの (=チャセンシダ; アスプレニウム・トリコマネス *Asplenium trichomanes* L.; チャセンシダ科) と黒いもの (=ホウライシダ; アディアントウム・カピッルス・ウェネリス *Adiantum capillus-veneris* L.) の2種類が記されている。▼古代ギリシア語ではホウライシダはアディアントス (ἀδίατρος <adiantos>; 濡れていない、の意) と呼ばれた。

**分布** 熱帯・亜寒帯・一部は温帯。多くは南北アメリカの熱帯・亜熱帯で、一部はヨーロッパ、オーストラリア圏、アジアなどの温帯。

**植生** 常緑・半常緑・落葉/多年草(シダ類)。岩生、地生。多くは樹林周辺、日陰の岩場、川辺、滝付近、水のしみ出す岩壁などに自生。一部の種は森林の暗い日陰に生息する。高さ15cm~2m。

**メモ** 種の数: 約200~250。草姿がしなやかで、細やかな葉(葉状体)を多数もつシダ類。耐寒種と非耐寒種がある。観葉植物にはホウライシダのほか、クジャクシダ (*A. pedatum* アディアントウム・ペダトゥム) の系統などがある。▼ポピュラーな美しいシダ植物だが、一般家庭で通年栽培するのは、湿度と温度管理の点で必ずしも容易ではない。▼クロンキスト分類体系ではホウライシダ科 (Adiantaceae) に属し、APG分類では再びイノモトソウ科となった。

**茎・幹** 株立ち状。茎はごく細く、黒いが、しなやかで強い。根茎がよく分枝する。[地下茎・根] 根茎性。(根茎は長茎または短茎または匍匐または立上がり)。

**葉** 明るい緑色で薄く、水滴をはじく。1~5回羽状複葉。孢子嚢群は必要最小限以下のものであり、稔性葉と不稔性葉は一般的に見分けにくい。[出方・配列] 互生。[単葉/複葉・切れ込み] 羽状複葉、鳥足状複葉。[葉身] 広卵形、腎臓形、三角形、線形、披針形、他。

**光の条件** 1 日陰 2 明るい日陰 3 半日陰 4 明るい半日陰 5 直射日光 ※強い直射日光は適さない。また、光がまったく入らない場所も不適。

**温度性質** 1 強耐寒性 2 耐霜性 3 半耐寒性 4 非耐寒性 [耐寒温度] 2~13°C (種による) [生育適温] 20~30°C

**空中湿度** 1 乾燥 2 乾燥ぎみ 3 中湿 4 多湿ぎみ 5 多湿

**土壌湿度** 1 乾燥 2 乾燥ぎみ 3 中湿 4 多湿 5 水浸

**栽培用土** pH 4~6。腐植質に富み、水はけ・保水がよい土。[肥沃度] 肥料分が少ない。[用土例] 壤土1+腐植1 / 腐葉土2+砂1 ※ホウライシダ (*A. capillus*) は湿潤なアルカリ性土を好むので、木炭と石灰岩を加えるとよい。

**肥料** [元肥] 不要。[液肥] 生育期に規定より1/2薄い濃度で月1回。※ごく少ない施肥でよい。

**植付け・植替え** 生育に合わせ、ひと回り大きな鉢に植え替えていく。大株になったらナイフで土ごと根鉢を切り分ける。根が細かいので根鉢を無理にほぐさないほうがよく、根傷みしないようにいねいに扱う。

**水やり** 水切れでは葉が縮れる。葉先や新芽が湿るようにする。[葉水] まめに霧吹きし、空中湿度を高める。

**手入れ** 通気をよくし、まめに霧吹きする。傷んだ葉は随時取り除く程度とし、放任でよい。茎が丈夫なので引きちぎらず、地ぎわからハサミで切る。乾燥が続いて葉が枯れあがった場合は地ぎわで刈り込み、新芽を育てる。

**冬越し** 屋内の明るく暖かい場所に置く。低温に耐える種もあるが、通常は5~6°C以上、熱帯種はさらに高温を保つ。水やりの量を少なめにして土はやや乾きぎみとし、霧吹きで空中湿度を保つ。夜間は温室に入れるか、ポリエチレンの袋で覆い、保温・保湿する。

**繁殖** [繁殖方法] 実生 (15~21°C)、株分け。※熟し孢子を用土にまき15°C以上を保つ。株分けは初夏~梅雨期。